

	<p style="text-align: center;"><b>赤ちゃん誕生と</b></p> <p style="text-align: center;"><b>ペーパードライバー</b></p> <p style="text-align: center;"><b>SCE・Net 梅村文夫</b></p>	<p style="text-align: center;"><b>E-90</b></p> <p style="text-align: center;">発行日 2016.9.18</p>
---	--	---

他県に住む一人娘が、正月に帰省した時である。赤子を宿した。出産予定日は8月10日。里帰り出産としたいので、病院を私の住む実家の近くで探したい。6月末頃からは、実家に戻り、出産に備えたい。そんな話があった。結婚後しばらく赤子を宿したとの報告が無かったので、喜ぶとともに、無事に生まれる事を願って、早速神社にお参りに行き、安産を願った。私にとっての初孫である。私は初孫の話聞き、なぜか「命の繋がり」を感じた。両親から私に命がバトンタッチされ、そしてその命は我が娘へと繋がり、そして私らの血はさらに、8月に生まれてくる孫に繋がっていく。ある意味で、私ら夫婦の血は、薄まりつつも、次の代・次の代と繰り返す、未来永劫に引き継がれていくのであろう。30年ほど前に娘を授かった時は、我が子を授かった嬉しさを感じた事を覚えているが、命の繋がりをそれほど感じた覚えは無い。私は年をとり、これからどのくらい長く生きられるのか分らない年齢になった。そのような気持ちの変化が、孫の誕生に対して、命の繋がりを感じたのであろう。古い命は消えていくが、その命は新しい命に繋がり、新しい命が誕生する。

さて、早速病院探しとなったが、我が家の近くには適当な病院が見つからない。知人から、隣の市に立派な施設を備えたクリニック(A)がある事を教えてもらい、早速見学を申し込んだ。多少距離が離れている点が気になるが、静かな田園地域に立地されており、周りには緑豊かな風景が繋がる。クリニック(A)のロビーは静かで優しく、入院部屋はゆったりとしたスペースで、ホテルの客室なみに丁寧に手が掛けられていた。助産師の方々の対応は丁寧で、迷いなくこのクリニックに申し込みを済ませた。

さて、クリニックでの月に一回の健診が早速始まった。主な健診内容は超音波で赤子の成長具合を画像で調べる事と、赤ちゃんの心臓の波打つ音を記録する事である。これらのデータはコンピュータに記録される。データはUSBにコピーされ、自宅に持ち帰る事が出来る。健診の日には月一度の娘の里帰りの日ともなり、私は自宅の私のパソコンで赤子の画像(動画)を見、心臓の動きを画像で見る。クリニックでの最初の健診は2月であった。赤子を宿してまだ数か月にも満たないが、パソコンで見る動画には顔と胴体、手と足等の動き、波打つ心臓の動きがきちんと映し出されている。さらに少し日が経過すると、顔の

輪郭と目、鼻、口、耳等が明瞭に映し出された。赤子はお腹の中でじっとしていない。超音波の角度では顔が映し出されず後頭部しか見えない時もある。娘は動画を見ながら「こっち向いて、こっち向いて」とパソコンに声を掛ける。

私が娘を授かったのは約30年前である。その時も超音波による健診はあったが、今日のように、データを自宅のパソコンで見る事は出来なかった。また、動画の画像も、今日の方がはるかに明瞭で見やすい。技術は確実に進歩し続けている。人の命を扱う医学分野では、多分、その進歩は先進的なのであろう。

ところで、娘は6月の末から、出産の為里帰りをする予定となっていた。しかし、つわりがひどく食事をとれないという事で、6月に入ると、時々泊まりがけで里帰りするようになった。食べ物としては、はじめは、冷やしそう麺、パイナップル、ゼリー、アイスクリームなら食べられるという事なので、そう麺をゆでるとともに、上質なアイスクリームやゼリー、パイナップルをよく買ってきてあげたが、しばらくするとパイナップルは食べられなくなり、食べられそうなものを探すのが私の仕事となった。6月25日からは、娘は、実家で毎日過ごすことになった。



さて、話は変わるが、題名にある「ペーパードライバー」の件である。私は若い頃に自動車の運転免許をとった。しかし、その頃はまだ車を所持してなかったので、ペーパードライバーとなってしまった。結婚後車を購入したが、家内が運転してくれたし、娘が免許をとった後は、娘も運転してくれた。その為、運転は家族に任せ、私は正真正銘のペーパードライバーとなってしまった。今まではそれで良かったのであったが、娘のお産を迎え、事態が変わった。家族から強くペーパードライバー返上を求められた。理由は、お産はいつ始まるか分からない。陣痛が始まったら、急遽娘をクリニックに連れていかなければならない。クリニックまでには多少距離がある。万全を期するために、家内一人しか運転できないのでは心細い。娘のために、お産を迎える8月には、私もきちんと運転できるようになってほしい。家族の言い分である。

娘のお産を迎え、私が最初に行く大仕事はペーパードライバー返上となった。私の年齢は69歳、9月を迎えると70歳、高齢運転者標識を付ける年齢である。その高齢者がペーパードライバーを返上しなければならない。高齢運転者の事故が増えている事は、色々のところで聞く。高齢運転者が、ブレーキとアクセルを間違い、大事故を起こした事も聞く。果たして高齢ペーパードライバーは、無事車の運転が出来るのであろうか？大きな覚悟をしなければならなかった。

5月の初め、近くの自動車教習所でペーパードライバー者向けの講習を受けることに決

めた。教習所所内の運転コースを初めて走った時は、両手が確実にこわばった。S字コース、L字コースでは度々コースをはみ出し、教官に叱られた。最初は本当に運転できるようになるのか、不安であったが、数回走ると何となく少しづつコツが分かってきた。10回（10時間）以上所内を走った頃、一般道路で走ってみるかと言われた。「やっと、一般道路を走れる」。その時の嬉しさは、今でも忘れられない。初めての一般道路は、意外と比較的スムーズに走れた事を記憶している。所内のS字やL字といった難しいコースは、一般道路には無かった。車道の幅は比較的広く、左折、右折箇所も教習所のコースよりゆとりがあり、走る事に対して多少安心した。

6月に入り、いよいよ自分の車を運転する事にした。高齢運転者標識を2つ購入し、車の前後に貼り付けた。一般通路を自分の車を運転し、自分で走る事に、喜びを感じたが、一方怖さも感じた。また、車庫入れのコツがなかなかつかめず、車庫入れには手こずった。

私のペーパードライバー返上の理由は、娘に陣痛が始まった時、娘をクリニックに何時でも連れて行かれるようにしておく事である。クリニックは自宅から車で20～30分程度の所である。本番を前に、シミュレーションとして何度かクリニックまで運転した。7月に入り、私の運転技能も安定感を増してきた。夜間の運転、雨の日の運転練習をこなし、何時でも娘を載せてクリニックに行ける自信がついた。

一方、娘の出産予定日の8月10日は一日一日と近づいてきた。8月2日の健診で、出産の兆しが見られないので、予定通り出産を迎えるために、散歩等の運動をした方が良いと、医者からアドバイスを受けた。お腹が大きく膨れた娘を一人で散歩させる訳にはいかない。私が付き添って散歩させる事にした。8月3日の夕方、娘と一緒に家の近くの公園を散歩した。30～40分程度の散歩であった。2人で散歩した過去の記憶など今となってはほとんど定かでない。久しぶりに娘と2人で散歩する幸せを感じた。これから出産日までの幾日かは毎日2人で散歩する事となる。それが楽しみだ。そう思った。しかし、この日の2人の散歩は、最初で最後の散歩となった。

散歩した翌日の8月4日、朝起きると、娘がお腹が少し痛いと言う。しばらく様子を見たが、お腹の痛さは変わることなく、むしろ少しずつ痛さは増した。午後になると痛さはさらに増し、周期的来るようになった。予定日より少し早い、陣痛と判断した。午後2時半頃、入院するのに必要な衣類等の一式を車に運び込み、私ら夫婦と娘はクリニックへ向かった。私ら3人は分娩室に案内され、娘には陣痛の大きさ（山の高さ）と陣痛の周期をモニターする装置が取り付けられた。助産師の診断によると、子宮口は3cm程度であり、まだ張りが弱く、前駆陣痛だとの事である。いったん自宅にもどり、様子を見て、痛さが強まってから再度来るようにとの指示が出された。出産は早ければ本日で、遅くとも翌日早々

と告げられた。娘は夫に電話をする。夫は仕事が終わりに次第こちらへ向かうとのことである。

午後6時頃、我慢できないほどの痛みだとのことで、再度車でクリニックに向かった。子宮口は4cm程度に広がり、陣痛室に案内された。モニタに示されている陣痛の山の大きさは確実に大きくなっていった。しばらくして、娘の夫が病院に到着した。

午後9時頃となると子宮口は6cmとなり、私ら夫婦も娘の夫とともに陣痛室で待機する事となった。娘の夫は、カメラと三脚を用意し、動画を撮る準備を怠らなかつた。我が子誕生の様子とその瞬間をすべてを動画で記録するとの事である。

午後10時過ぎとなる。娘が分娩室に移ったので、そろそろ赤ちゃん誕生かと思い、私と家内は陣痛室で待っていたが、進展が思うように進まない。私ら老夫婦は待合室で待機する事とした。その頃になると、夫の両親もクリニックに到着し、夫の両親、私ら夫婦の4人が待合室で待つこととなった。

夜中の12時を回った。進展が一向にない。一体分娩室の中はどうなっているのか、少しばかり不安がよぎる。分娩室に耳をあてると、陣痛に耐える娘のうめき声が、かすかながら聞こえる。

午前2時頃（翌日：8月5日）：いよいよ出産という連絡で、私ら夫婦は分娩室に移る事にした。それに続いて、夫のお母さんも分娩室に入った。いよいよと期待が膨らむが、聞こえてくる声は、娘が力む声と、夫が掛ける励ましの言葉だけであった。近くには、酸素モニタと赤子の心音のモニタが映し出されている。娘の目からは、陣痛に耐える苦しみのため、うっすらと涙が出ていた。夫がその涙を拭いていた。

午前3時頃；赤ちゃんがなかなか誕生しない。助産師から出産のために会陰切開が必要であると伝えられ、医師が分娩室に入る。医師の手が入り、会陰切開が行われた。

「オギャ」の声と共に、赤子は助産師に抱えられた。赤子は直ちに綺麗な布で拭かれて（産湯には浸からない）、そのまま母親（娘）の胸の上に置かれた。新しい命の誕生の瞬間である。娘の安堵した顔、夫の喜ぶ顔が印象的であった。その頃には、夫のお父さんも分娩室に入り、7人（赤子と3夫婦）が分娩室で一同となる。

入院は5日間限りで、8月9日からは、娘夫婦と赤子は我が家に移った。早速、赤ちゃん誕生の瞬間を映した動画を見ることとなった。オギャという声と共に、助産師が赤ちゃんを抱え上げる瞬間が確実にとらえられていた。感動の瞬間を振り返るに十分な動画であった。

30年ほど昔、私の妻の出産（娘の誕生）の時は、男は分娩室に入る事は許されなかつた。出産後、娘は産湯で綺麗に洗われ、看護師さんが娘を連れてきた。それが娘と私との初めての対面であった。クリニック（A）では、出産が、家族立会いのもとで行われた。私としては初めての経験であり、生まれた瞬間が、新しい命との対面の時となった。女性し

か分からない、子供を産む苦しさが、男の私にも多少理解できる瞬間であり、命の大切さを知る瞬間となった。クリニック（A）のオープンな姿勢に感謝するとともに、時代における価値観の変化を感じる。



後書き：その後の私の毎日の日課は、赤子のお風呂の用意とその後片付けである。9月19日には、娘は赤子をつれて夫が待つ他県に戻る。この子が、健康で無事に元気に育つことを祈るのみである。